

学会企画シンポジウム 3

教員による子どもへの暴力はなぜなくなるのか

企画・司会：佐藤有耕（筑波大学）

企画・指定討論：尾見康博（山梨大学）

部活の文化心理学の立場から

話題提供：渋谷崇行（桐蔭横浜大学）

コーチ育成の心理学の立場から

話題提供：大対香奈子（近畿大学）

行動分析の立場から

話題提供：西田公昭#（立正大学）

マインドコントロールの立場から

指定討論：鹿毛雅治（慶應義塾大学）

教員養成や動機づけなど広い視点から

企画趣旨：

2022 年度に子どもへの体罰で懲戒処分などを受けた公立学校教員の数は全国で 397 人となり、大阪市立桜宮高校での事件により調査方法が変わった 2013 年度以降初めて増加に転じた（文部科学省，2023）。懲戒処分にならなかった事例やそもそも調査で把握できない事例があることもふまえると、いぜんとして一定程度の教員が体罰に無自覚、あるいは体罰を肯定していると考えざるを得ない。いまどき教員が聖職者である必要はないが、少なくとも社会のルールや法律を守る社会人であることは当然求められる。そしてそれが子どもの人権に係る案件であればなおのことである。桜宮高校の事件以来、それまで以上に体罰がさまざまなメディアで否定され、文部科学省からも体罰を禁止する通達がなされてきたにもかかわらず、なぜ教員による体罰がそれなりにまかり通っているのか、本シンポジウムではまず、この基本的な問いについて考えたい。また、教員によることばの暴力や心理的暴力にあまり目が向けられていない背景についても検討し、教師不足が叫ばれるなか、教員養成のプロセス、あるいは現職教員の研修等でできることがないのか、議論したい。